

『改訂版 アップグレード 英文法・語法問題』の データリサーチ

霜 康司

英文法・語法問題集は必要か？

近年大学入試で、短文空所補充問題や短文の語句整序問題の出題が減少している。たとえばセンター試験では短文空所補充問題が10問、語句整序問題が3問出題されているが、国公立大学の二次試験で短文の問題はほとんど出題されないし、私大の入試でもかなり減少している。

しかし、だからといって英文法・語法問題集の必要性が減ったわけではない。たとえば、下の東京大学の入試問題を見て頂きたい。

設問 次の英文の下線部(1)～(5)には、文法上取り除かなければならない語が一語ずつある。所定欄に該当する語を記せ。

... (3) Researchers are eagerly looking for an information about what causes these giants to erupt, when they could become destructive again, and how much damage might result. ...

東京大学

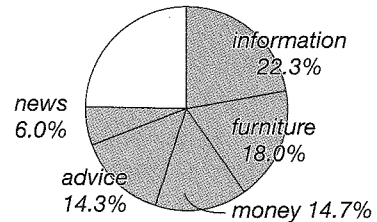
これは実際には約140語程度の文章で、紙面の都合上、一部分だけを収録した。短文空所補充問題とは異なって、一見しただけでは何が問われているのかわかりにくいですが、一読すれば、不可算名詞であるはずの *information* が、*an information* となっているのに気づかれたらう。もちろん正解は *an* を取り除くということになる。

このような問題を見れば、英文法・語法の知識の必要性がなくなったわけではないのは明らかだ。実際、正誤問題を出題する大学は増えており、これまで以上に正確な知識が求められるようになったと言える。

データリサーチの適中力

さてこの *information* は一体どのぐらいの頻度

で出題されているのだろうか。そこで『アップグレード 英文法・語法問題』のデータリサーチをご覧頂きたい。



ご覧のように *information* は不可算名詞で第1位の出題数だ。(不可算名詞の出題は13年間で217問。)東京大学のように形式に工夫が凝らされていても、<頻出事項=重要事項>であると言えるだろう。

もちろん、英語において不可算名詞は数限りなく存在するから、英作文などあらゆる問題に対応しようと思えば無限に覚え続けなければならない。しかし、上のグラフが示すように不可算名詞の全出題のうち、たった5つの単語に関する出題が75%を越えるのだ。全部で10個の不可算名詞を覚えていれば91%をカバーできるのである。東京大学の入試でも頻度第1位の項目が出題されているのだから、データに裏打ちされた重要事項を確認することが合格への近道であることは間違いないだろう。

なぜデータか？

～<頻度=重要度>のデータリサーチ

大学入試で困らないためには実際どれだけの知識が必要か。そのシンプルな疑問に答えるため、『アップグレード 英文法・語法問題』において私たちは新たに最新データ3年分(約1200大学分)を加え、計13年間の大学入試問題を徹底的に分析した。実に膨大なデータだが、これだけのデータを利用する意味がどこにあるかと思われる方もおられるかもしれない。しかし、たとえば時制の章の *Data Research* をご覧頂ければ私たちが膨大なデータに

こだわった理由もご理解頂けるはずだ。

時・条件の副詞節中の時制 (352)

現在完了形 (320)

過去形 (262)

過去完了形 (241)

現在完了進行形 (69)

未来完了形 (66)

1位の「時・条件の副詞節中の時制」は、英語の授業で必ずふれられる重要項目だが、ここでも見事に<頻度=重要度>になっていることに気づいて頂けるだろう。

仮に一部の難関大学のみデータをういたりすると、その頻度は決して重要度順にはならない。たとえば、今年の入試問題で上智大学では adamant という単語の意味が問われ、同志社大学では fervently という単語の意味が問われた。しかし、これらの単語までカバーするには、1万語を越える語彙力が必要で、出題者の方もそんな力を求めているわけではない。単に文脈から意味を類推する能力を求めているに過ぎない。つまり、これらの単語が同じ大学でもう一度出題される可能性は極めて低いと考えるのが妥当だろう。受験する大学の過去の入試問題だけを教材にしても、英語学習の上で必須の知識が欠落してしまうばかりか、結果としてそれらの大学の入試問題に対応できないということになってしまうのだ。

私たちが膨大なデータにこだわった理由がここにある。比較的難易度の低い大学から難関大まで、幅広いデータを分析してこそ、はじめて<頻度=重要度>と言えるデータが得られるのだ。

多義語の意味まで頻度チェック！

上記のようにデータ分析に基づいた結果、『アップグレード 英文法・語法問題』は、その構成、収録項目、記事内容の点で、類書と大きく異なる。

次の多義語のデータを見ていただく。

account (206)

case (193)

chance (142)

term (118)

charge (82)

第1位の account は so ... that ~ 構文の出題数(206題)よりも多い出題を誇る。account だけではない。

たとえば work「うまくいく；機能する」は、センター試験で過去に3回も出題されている重要事項だ。あらゆる大学の入試問題において多義語は極めて重要だが、果たしてその頻度・重要度に応じた扱いをしている参考書がどれだけあるだろうか。

従来の参考書は500ページ近くあっても、これだけ頻出の多義語をろくに載せてこなかった。たとえば account for A を類書で調べて欲しい。もし「A を説明する」としか書いてないとしたら、決してお薦めできない。なぜなら最近3年間で account は53題出題されているが、「A を説明する」はその中の14題にすぎないからである。それと同じくらい重要な用法で「<割合など>を占める」という意味がセンター試験の設問にさえ出現している。私たちはこうした多義語の意味の頻度まで徹底調査し、覚えるべきものをしっかりと網羅した。

高得点=正答率の高い設問を獲得

さて、一体どこまで覚えれば入試をクリアできるのかと途方に暮れる受験生に、是非知って欲しいデータがある。それはセンター試験の正答率に関するデータだ。我々の独自調査によると、センター試験(200点満点)で正答率が50%を越える問題は、平均すると170~180点分ある。つまり、正答率が50%以上の問題だけを全部正解できれば、9割近い得点が見込めるのだ。

私立大学や二次試験についても同様のことが言える。冒頭にあげた東京大学の入試問題をもう一度思い出して欲しい。東大を受験しても information が不可算名詞であることが問われるのだから、難問奇問を捨てて基本事項を整理すれば十分合格点を獲得できるのだ。『アップグレード 英文法・語法問題』作成にあたっては、情報量をできるだけ絞り込み読者に無用な負担を強くないよう心がけたのは言うまでもない。

センター試験から発展問題へレベル分け

本書の編集にあたっては、あらゆる層の学生にとって使いやすいように配慮した。初学者が基本問題だけに集中することもでき、上級者が基礎を確認しながら難易度の高い発展問題にだけ挑戦することもできるように工夫を凝らした。

まずセンター試験に既出の事項にはセクのマーク

を付けた。下のデータはセンター試験の第2問685問中で最頻出の文法項目だ(追試を含む)。これを見ればセンター試験では決して英語全体の中からまんべんなく出題されているのではなく、特定の項目が何度も狙われていることがわかるだろう。

不定詞 (45)

接続詞 (36)

関係詞 (34)

時間の限られた受験生は、上記の項目のようには毎年センター試験に登場する項目からマスターすべきであろう。さらに、センター試験の出題を単語別に見ると、what 関連が21問で第1位(2位はhave 14題)だが、これまた『アップグレード 英文法・語法問題』の関係詞の分析とバッチリ一致している。

関係代名詞の what (403)

前置詞+関係代名詞 (230)

関係代名詞の which (182)

関係代名詞目的格の省略 (175)

関係副詞 where (164)

ご覧のように、センター試験第1位の what が、13年間の入試問題でも最頻出事項になっている。センター試験でも<データリサーチの頻度=重要度>なのだ。

もちろん『アップグレード 英文法・語法問題』の分析はセンター試験にとどまらない。早慶上智など最難関大学の入試で特に重要な設問は「発展」マークを付けて収録している。本書をマスターすれば最難関の大学入試でも合格点を確実に取れるので、安心して取り組んで欲しい。

重要事項を確実に得点できるようにするためには反復練習が必要だ。とはいえ同じ本を繰り返すだけでは、飽きてしまうのも人情だ。そこで『アップグレード 英文法・語法問題』に準拠した問題集『アップグレード 英文法・語法問題完全演習<標準編>』も改訂したので是非取り組んで頂きたい。さらに余力がある上級者向けに『アップグレード 英文法・語法問題完全演習<上級編>』を新たに作成した。基本事項を省き、複合的な問題や難易度の高い問題を中心に収録している。最難関校受験対策に利用されたい。

頭スッキリ！ 覚えるための整理本

どれほどデータを分析し、正しい英語を収録していたとしても、使っている学生の頭に何も残らなければ意味がない。そこで『アップグレード 英文法・語法問題』には随所に覚えるためのノウハウをちりばめた。

たとえば英熟語の章を見ていただきたい。

Upgrade 207 come と bring は自動詞と他動詞のペア

自動詞 come に対応する他動詞が bring だ。熟語でもこの関係は成り立つ。

Ⓐ come to an end 「A が終わりになる」

bring Ⓐ to an end 「A を終わりにする」

上のように come の主語 A が bring の目的語になっているペアの熟語がたくさんある。(訳語の「が…なる」→「を…する」にも注意)

このように提示すれば、一つ一つの熟語をバラバラに覚える必要はなくなる。A come about 「A が起こる」と bring A about 「A を引き起こす」も、A come out 「A が出版される」と bring A out 「A を出版する」も同じように整理できるから、きわめて効率よく頭に収まるはずだ。

もう一つ例を挙げよう。

Upgrade 274 「わかる」の out

「隠されていたことが外に出る=わかる」という意味。

こうしてまとめれば make A out; figure A out; turn out; work A out; find A out など、「わかる」という意味の熟語を一気に覚えることもできるのだ。本書の設問の配列はこのようなまとまりが自然と覚えられるように構成されており、頭に残る整理本として機能するように配慮した。

最後に『アップグレード 英文法・語法問題』初版発行以来、読者はもちろん英語の先生方からも数々の貴重な助言を頂いた。この場を借りてお礼を申し上げます。今回もまた『アップグレード 英文法・語法問題』をご高覧頂き、さらに Upgrade させる御教示を頂ければ望外の幸せである。

(PRODIGY 英語研究所最高顧問(C.E.O.)・

駿台予備学校講師)